

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 尾崎 海希 年齢 15 歳 職業・学校名 欠吹中

私は東日本大震災で被害をうけ、今までも
 の家に戻ることにできて、いい人たちの助け
 を早く家に帰れるようにあることが一番大切
 だと思います。そのためには原発問題をどうにか
 しなければいけないと思います。地震と津波に合
 わせて原発による汚染問題なども起きて復興
 がより遅くなってしまう。だから私は
 これからの未来は原子力発電所をなくして
 った方がよいと思う。私たちは地震と汚染の
 怖さを体験しています。自然の力は勝つこと
 は出さないと思うので地震がきたら危ないこ
 いうことはなくすべからずと思う。自然の力に
 けに苦しめられるのではなく人がかつかつりだ
 したことに苦しめられることの変化を知
 った。前のようにもとの福島に戻れるように
 私もできることをしていきたい。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 伊藤 木雅

年齢 15 歳

職業

学校名 知吹町立知吹中学校

二〇一一年の三月十一日、突然、日本を大
 きな揺れが襲った。誰も経験した事がない大
 きな地震であった。その時、私は小学校の体
 育館にいた。いつもどうも、だうだうとした
 時間を過ごしている時、当然の事が起こり、
 正直びっくりした以上に面白がっていた。今
 考えると、やっていけない行動だと思う。同
 じ時間を過ごしている時、往々地域によって、
 津波や放射能などに毎日おびえながら生活し
 ている人もいる。この時、私は家族とあたり
 まえのよう生活している事が幸せな事だと思
 った。東日本大震災から経つそろ約五年か
 た。た今、震災前と変わらぬ生活をしてい
 る人がいれば、震災で多くの物を失った人も
 いる。そして、災害を感じさせないような町
 や村の復興してきた所もある。震災を経験し
 た人達は、もちろん失った物は多いがその分
 この五年間で得た事も多いと思う。この悲し
 い経験を後世に伝える必要がある。そして、
 一日を大切に、幸せに生きていけるべきである。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 遠藤 晃也

年齢 14歳

職業・学校名 矢吹中学校

私は大震災で体験したことは、建物が次々と
 こわれていくのを見て、家や家族は大丈夫な
 のかなとすごく心配になりました。でも家
 に帰るとみると、家族全員無事だ。たのほ
 としました。震災を通して復興への想いは、
 まだ震災の被害があるところもあるので、早く
 元に戻るとほしーと思います。私も被災地に
 すこしでも良くな、てもらえるように、ぼき
 んやなど色々な活動に参加して少しでも復興
 のかにならねらなと思います。これからも震
 災はと忘れずに生きていきたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 園井 登人 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹中学校

私は、東日本大震災発生当時、小学校四年
生でした。卒業式の練習に取り組んでいま
ら、突然、地球がヒンガ入るたかと思
うような揺れが起きました。パニックにな
りながらも必死の思いで避難しました。ま
たが、震災は私に、恐怖だけでなく、先
くさんのことを教えてくれました。
1つ目は、「当たり前」の生活ができる喜
びです。震災が発生しライフラインが絶
た食べ物が入らなくなり、「節約」を意
識に生活しなければいけなくなりました。
その時、「当たり前」の生活ができていた
ことに感謝しなければいけないと思
いました。
2つ目は、周囲の人々の優しさです。揺
れが収まり家に帰ると近くの人が道路
に散らかったゴミを片付けてくれたり、
氷を分けてくれたりして、その人の優
しさが素晴らしいと感じました。
これから先、震災で得たものの、失
ったもの、考え直す必要があると思

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 能田 直大 年齢 14 歳 職業・学校名 矢吹中学校

わたしは、東日本大震災が起きたとき、小
 学校4年生でした。その時の授業は卒業式に
 向けこの体育館での練習でした。体育館とい
 うこともあり、体をかくす場所がなかったた
 め非常に不安で怖かったです。今も覚えて
 います。震災直後は全校生徒で、校庭に集まり
 迎えを待っていました。その時は、体育館か
 らまっすぐ校庭にむいてくると、上着も
 なかったのに、何時間の寒さにも耐えられた
 ことがあったのです。現在、あたしの地域はほ
 ぼ震災の跡が消えていきました。まだ、震災
 の傷がそのまま残っているところを見ても
 少し悲しくなります。なので、少しでも早く
 自分達の地域だけでなく、全この地域の震災
 での傷を癒やしてほしいと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 佐藤 翔太

年齢 15 歳

職業・学校名 吹中学校

2	0	1	1	年	3	月	11	日	東	日	本	大	震	災	が	お	き	た			
と	き	僕	は	自	宅	で	テ	レ	ビ	シ	キ	を	見	て	い	た	。	今	ま	で	経
験	し	た	こ	の	な	い	大	き	な	震	え	に	恐	怖	を	感	い	た	。		
幸	い	に	も	自	宅	の	被	害	は	屋	根	の	瓦	が	数	枚	落	ち	た		
だ	け	で	す	ん	だ	が	昨	日	の	新	聞	で	巨	大	な	津	波	が	多		
く	の	命	を	奪	。た	こ	と	を	知	っ	て	と	て	も	悲	し	く	な			
り	ま	し	た	。	そ	の	他	に	も	福	島	第	一	原	発	の	爆	発	で		
大	き	な	被	害	を	受	け	て	い	る	こ	と	も	と	て	も	怖	か			
た	。	小	供	だ	っ	た	僕	で	も	大	変	な	こ	と	が	お	き	て	い		
る	と	あ	か	。	た	。	生	涯	絶	対	に	忘	れ	る	こ	と	が	で	き		
な	く	忘	れ	て	は	い	け	な	い	こ	と	だ	と	思	え	。					
。	た	く	さ	ん	の	人	の	協	力	が	復	興	が	進	ん	で	ま	て	い		
こ	の	力	は	す	こ	い	と	改	め	て	あ	か	っ	た	。	ど	も	人			
の	心	は	ま	だ	傷	つ	い	た	ま	ま	だ	と	思	う	。	大	切	な	人		
を	失	な	っ	た	人	。	ま	だ	遺	体	が	見	つ	か	っ	て	い	な			
人	。	そ	の	他	に	も	と	て	も	心	が	傷	つ	い	て	い	る	人	の		
心	が	1	日	で	も	早	く	少	し	が	も	果	に	な	っ	て	ほ	し	い		
と	思	う	。																		

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 岩戸 隆致 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹中学校

私は小学校四年生の時に大震災を経験をしま

した。

その時の様子を今でもよく覚えています。卓

て物が大きく揺れ、ぶつかり合い壊れていく

所を目で見ました。また地面は大きく揺れ、

とても立っていかれた状態ではありませんでした。

また、

ニュースやテレビ、ラジオからは津波

などの警報が何回も来てとても怖かったです。

この津波や地震により多くの

人々が命を落とすことになりました。とても悲

しいと感じました。

今の街にもまだ震災の跡が残っており、あの

時起きた事を時々思い出すことがあります。

また、原子力発電所から出た放射能もまだ無

くか、これはなかなか無くならないと思います。

いいます。

これから福島が復興してくれることを願

っています。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 鈴木 司 年齢 15 歳 職業 学校名 矢吹中学校

私	は	、	3	月	11	日	の	出	来	事	は	絶	対	に	忘	れ	る	事		
は	ど	き	ま	せ	ん	。	ま	だ	私	達	が	小	学	三	年	生	の	時	に	
い	き	な	り	襲	っ	て	き	た	大	地	震	-	東	日	本	大	震	災	。	
そ	の	時	は	何	が	起	こ	っ	て	い	る	の	か	頭	の	中	が	真	っ	
白	で	全	然	分	か	り	ま	せ	ん	で	し	た	。	で	も	ぐ	ち	ゃ	ぐ	
ち	ゃ	に	な	っ	た	教	室	の	中	や	学	校	、	地	面	な	ど	も	見	
て	と	と	も	大	変	な	事	が	起	き	た	ん	だ	と	突	感	し	ま	し	
た	。	家	族	が	無	事	か	ど	う	か	と	て	お	バ	配	で	し	た	が	
母	は	無	事	で	と	と	も	安	心	し	ま	し	た	。	東	日	本	大	震	
災	の	復	興	に	向	り	た	取	り	組	み	や	福	島	県	民	の	協	力	
は	、	人	々	の	心	を	一	つ	に	し	た	と	思	い	ま	す	。	私	は	
空	手	を	習	っ	て	い	て	震	災	直	後	に	応	援	メ	ッ	セ	ー	ド	
や	良	い	物	な	ど	も	他	県	の	空	手	の	先	生	や	大	人	、	子	
供	の	人	ま	ど	た	く	さ	ん	送	っ	て	く	れ	ま	し	た	。	私	達	
が	震	災	を	乗	り	越	え	て	笑	顔	で	楽	し	く	過	ご	せ	て	い	
る	の	は	、	人	々	の	取	り	組	み	や	協	力	、	そ	し	て	他	県	
の	人	々	の	応	援	な	ど	も	あ	っ	た	か	ら	だ	と	思	っ	て	い	
ま	す	。	人	の	力	は	す	ご	い	を	東	日	大	震	災	か	ら	感	じ	
ま	し	た	。	だ	か	ら	全	部	と	は	言	わ	な	い	が	何	事	も	人	
の	力	で	良	い	ち	向	に	変	え	た	ら	し	ま	す	と	思	い	ま	す	。

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 鈴木蓮汰 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹中学校

私	は	、	小	学	生	の	時	に	、	人	生	で	一	番	大	き	く	二		
度	と	あ	う	こ	と	の	ほ	い	で	あ	ろ	う	大	震	災	を	経	験	し	
ま	し	た	。																	
当	時	の	3	月	11	日	は	、	学	校	の	友	達	と	家	で	遊	ん		
で	お	り	家	の	中	に	入	ら	う	と	し	た	時	、	急	に	大	き	な	
地	震	が	発	生	し	ま	し	た	。	屋	根	か	ら	は	、	瓦	が	次	々	
に	落	ち	て	き	て	、	壁	に	は	亀	裂	が	変	な	音	を	立	て	伝	
が	ら	入	っ	て	い	ま	し	た	。	家	は	、	大	規	模	半	壊	と	な	り
ま	い	ま	し	た	。															
震	災	の	直	後	は	電	話	も	ろ	く	に	使	え	ず	家	族	が	無	事	
で	い	る	か	と	心	配	で	し	た	。	家	族	は	無	事	で	次	の	日	
か	ら	従	兄	弟	の	家	に	住	ま	わ	せ	て	い	た	だ	き	ま	し	た	
。	テ	レ	ビ	を	つ	け	る	と	原	発	が	爆	発	し	た	と	か	放	射	
能	が	人	体	に	影	響	を	も	た	ら	す	と	か	い	ろ	い	ろ	構	造	
ニ	ュ	ー	ス	が	流	れ	と	て	も	と	て	も	心	配	し	ま	し	た	。	
今	も	住	む	こ	と	が	困	難	な	地	域	も	少	な	い	が	あ	る	と	
聞	き	ま	す	。	「	く	ら	お	金	を	払	っ	て	も	人	は	生	き	か	
え	る	こ	と	は	ほ	い	の	だ	か	ら	、	せ	め	て	「	刻	も	早	い	
復	旧	・	復	興	を	お	願	い	し	た	」	と	思	い	ま	す	。	3		
・	川	を	常	時	忘	れ	ず	、	生	活	し	て	い	き	た	い	で	す	。	

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 関根 幸佑 年齢 14 歳 職業・学校名 矢吹町立矢吹中学校

三	月	十	一	日	、	日	本	に	甚	大	な	被	害	を	も	た	ら	し	
た	東	日	本	大	震	災	、	私	は	、	そ	の	当	時	小	学	四	年	生
で	帰	り	の	会	の	時	で	し	た	。	小	さ	な	揺	れ	か	ら	大	き
な	揺	れ	え	と	変	わ	つ	こ	れ	ま	で	に	経	験	し	た	こ	の	
な	い	揺	れ	を	経	験	し	ま	し	た	。	机	の	下	で	陰	水	が	お
さ	ま	る	の	ま	ず	、	と	特	ち	、	家	へ	と	下	校	し	ま	と	た
家	へ	帰	る	と	タ	ブ	ス	が	倒	れ	て	い	た	り	か	か	ら	が	落
ち	て	い	た	り	と	甚	大	な	被	害	に	お	り	ま	し	た	。	テ	レ
ビ	を	つ	け	て	衝	激	が	走	り	ま	し	た	。	津	波	が	来	る	な
か	と	テ	レ	ビ	で	搬	送	し	て	り	た	の	で	す	。	あ	の	時	の
恐	怖	は	忘	れ	ら	れ	ま	せ	ん	。	水	道	は	出	な	り	、	風	呂
も	入	水	な	り	、	ト	イ	シ	も	流	す	こ	と	か	か	ま	な	い	。
毎	日	、	あ	た	り	削	の	よ	う	に	使	用	し	て	り	た	こ	と	が
突	然	機	能	し	な	く	な	る	と	と	こ	も	大	変	な	思	い	を	し
ま	し	た	。	震	災	を	経	験	し	、	い	つ	つ	地	震	か	ら	い	ち
常	食	を	準	備	す	イ	タ	ビ	シ	て	、	こ	ま	ら	な	い	よ	う	に
し	て	り	ま	た	り	で	す	。											

「東日本大震災の体験談と復興への思い」応募用紙

氏名 関根 沙文 年齢 15歳 職業・学校名 関根 沙文

二	〇	一	一	年	三	月	十	一	日	の	東	日	本	大	震	災	が	福	
島	県	は	津	波	や	原	発	の	事	故	な	ど	の	被	害	を	受	け	ま
し	た	。	そ	の	と	き	は	、	こ	れ	か	ら	ど	う	な	。	こ	し	ま
う	の	だ	げ	ら	と	思	い	、	こ	こ	を	恐	ろ	。	た	の	を	買	え
て	い	ま	す	。	し	か	し	、	そ	の	と	き	は	他	県	や	県	外	か
ら	助	け	て	も	ら	え	て	、	こ	こ	を	悔	し	、	う	れ	し	か	
し	た	が	す	。															
私	は	去	年	福	島	復	興	大	使	と	し	て	宮	崎	県	の	口	蹄	
疲	の	被	害	を	受	け	た	地	域	に	行	き	ま	し	た	。	そ	の	当
時	は	、	牛	な	ど	の	家	畜	を	す	べ	て	殺	さ	な	く	こ	は	な
ら	な	く	な	り	、	風	評	被	害	も	ど	か	。	た	そ	う	が	す	。
昔	被	害	を	受	け	た	人	か	目	に	涙	を	浮か	べ	な	か	ら	話	
し	て	い	き	の	を	聞	き	、	胸	を	打	た	れ	ま	し	た	。	私	は
県	外	で	頑	張	。	こ	い	ろ	人	た	ち	の	姿	を	見	て	、	勇	気
を	も	ら	い	、	自	分	た	ち	も	頑	張	り	以	前	の	福	島	に	負
け	な	い	と	う	に	復	興	し	た	い	と	思	い	ま	し	た	。		
今	自	分	に	出	来	る	こ	と	は	限	ら	れ	て	い	ま	す	か	。	
自	分	が	出	来	る	小	さ	な	こ	と	か	ら	福	島	県	の	復	興	の
た	め	に	頑	張	。	こ	い	こ	う	と	思	い	ま	す	。				

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 田谷涼雅 年齢 15 歳 職業・学校名 知久町立知久中学校

私は小学4年年の時に東日本大震災を経験
 しました。あの時の恐怖は今でも鮮明に覚
 えています。津波の被害もとても大きな復興に
 必要の時間がかかりました。また原発事故
 もありとても大変でした。私が住んで居る
 長比志知はおぼろげに人々の家に引き戸の水
 をもろ、ていきました。そして母はもう、た井
 戸水を近所の方々にくばりていきました。私は
 なせ今等しい情景毎のにくばりていけるの
 だろうと思いました。ですがあとも近所の方
 々にいろいろ助けをもらいました。そこで私
 は助け合、こるんだなと思いました。この
 とか助け合いか大切だと分かりました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 五十嵐 菜穂 年齢 15歳 職業・学校名 矢野中学校

四年前、突然襲った大きな地震。今までに経験しに事おはれ大なる揺れ。その揺れは、私の連の笑顔を奪った。
 「東日本大震災」との言葉だけが恐怖がよみかえらる。テレビに映る風景。その風景を私は信じることが出来なかった。家が流され殺風景なその姿が目に映ると私は絶望した。
 た。「希望」という言葉は為らぬ事ばかりだった。
 ある日から「放射線」という言葉が度々聞かれるようになった。その言葉は他の県と異なると変わったらしい。「うつろ」という言葉が悔しか、この時から「復興」の力に頼ろう。「希望」を持ち福島を元に戻そうと為れる事が出来た。
 この震災は「絶望」と「希望」を学ぶ事が出来た。私はこれだけ苦しくてもこれだけ悔しくても、「希望」を持ち続けたい。今の福島はまだ完璧ではない。「復興」というものは最初より美しくはない。私はこれだけ苦しくても私は頑張る。

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 小林 桃奈 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹中学校

東	日	本	大	震	災	が	発	生	じ	た	時	。	私	は	小	学	4																																																																																																																																																																																						
年	生	で	し	た	。	ど	の	日	、	日	直	の	仕	事	で	プ	リ	ン	ト																																																																																																																																																																																				
を	運	ん	で	い	ま	し	た	。	運	ん	で	い	る	時	、	揺	れ	が	ま																																																																																																																																																																																				
た	の	で	び	っ	く	り	し	ま	え	た	。	揺	れ	が	大	き	な	ほ	り																																																																																																																																																																																				
急	い	が	教	堂	に	戻	り	ま	し	た	。	友	達	は	、	机	の	下	に																																																																																																																																																																																				
の	下	に	隠	れ	て	い	た	の	で	、	私	も	机	の	下	に	潜	り	込	り	ま	し	た	。	揺	れ	が	お	さ	ま	い	た	頃	に	夜	庭																																																																																																																																																																			
に	避	難	し	、	ど	の	後	、	矢	生	の	付	き	と	い	で	無	事	に	家	に	帰	る	事	が	で	ま	ま	し	た	。	帰	る	途	中	、	瓦	や	堀																																																																																																																																																																
が	崩	れ	落	ち	、	道	路	の	あ	ち	あ	ち	が	盛	り	上	が	り	、	天	変	な	事	が	起	き	ま	す	と	い	う	事	が	分	か	り	ま	し	た	。	家	の	中	は	色	々	な	物	が	落	ち	て	い	ま	し	た	が	両	親	は	大	丈	夫	な	の	か	不	安	だ	と	し	た	。	両	親	が	帰	っ	て	来	た	時	は	う	れ	し	か	っ	た	と	い	う	事	が	あ	っ	た	。	一	生	の	一	度	あ	る	か	な	い	か	の	体	験	を	し	ま	し	た	。	ど	も	こ	の	震	災	で	家	族	を	失	った	人	が	い	ま	す	。	福	島	県	は	地	震	の	他	に	原	発	の	問	題	も	あ	り	、	と	も	梁	刻	だ	と	い	う	事	が	あ	る	。	ど	も	お	互	い	の	力	を	合	わ	せ	、	頑	張	り	て	い	か	な	け	れ	ば	な	ら	な	い	と	思	い	ま	す	。

(20文字 × 20行)

「市口太十雲々の体験談と海軍人の想い」(藤田草紙)

匿名希望

東日本大震災では、たくさんの方々が津波にのまれました。私の住んでいる町では、建物が崩れ、店内の物もすべて落ち、道路もマンホールが飛び出していました。津波はきませんでしたでしたが、当時小学四年生だ。た私は恐怖でいっぱいでした。私の住んでいるのは、宮城県に居ていて、家は津波でなくなってしまいました。私はテレビでしか津波を見たことがないけれど、実際に津波を見たところは、もっと怖かったと思います。今もまだ元の町に戻っていない所もあるので、一人一人が助け合いながら、復興できたらいいと思います。また、今回のことがあり人との関係も深まりましたと思うので、今後またこのようなことがあったら、行動を早くし、一人でも多くの人を助けることができるといいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 近内 桃花 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹中学校

私は、当時4年生だった。その時私は、体育館で、卒業式の子行練習をしていた。突然今までに経験したことのない揺れに襲われた。先生が、「イスで頭を守りなさい。」といわれ無夢無中でイスで頭を守りました。揺れで、お友達の手が滑って飛んでいってしまふほどのすごい揺れでした。その後先生の指示に従ってグラウンドに避難しました。みんな初めこの恐怖で泣いてしまいました。私がこの揺れの中で思ったことは、「父と母が死んでしまっただのではないか。弟や妹は無事なのか」ととてもとても心配でした。持っている間の時間は何分何時間だったのか分らないほど長く感じました。母が即に来てくれ、弟妹父にも会うことができず、家族全員でうれしか、たです。4年た、た今でもまだもとに戻れないところがたくさんありますが、みなさんがんばって昔の町、住らしをとり戻そうとしています。なので私もあの時の経験を忘れずに、復興へのお手伝いをなにかしたいと思えます。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 酒井はつき 年齢 15歳 職業・学校名 矢吹中学校

東	日	本	大	震	災	か	ら	約	4	年	か	た	ち	ま	し	た	。	復	
興	も	少	し	ず	づ	進	め	ら	れ	て	き	て	い	ま	す	。	し	か	し
震	災	か	ら	4	年	た	。	た	今	で	も	忘	れ	ら	れ	な	い	こ	と
か	あ	り	ま	す	。	そ	れ	か	風	評	被	害	で	す	。	当	時	の	私
は	風	評	被	害	と	い	う	言	葉	を	聞	い	た	と	き	シ	ョ	ッ	ク
を	隠	せ	ま	せ	ん	で	し	た	。	「	福	島	」	の	ナ	ン	バ	ー	か
っ	い	て	い	る	車	で	出	か	け	る	こ	と	か	。	あ	れ	ほ	ど	不
安	に	な	る	な	ん	て	思	っ	て	も	い	ま	せ	ん	で	し	た	。	福
島	県	か	他	県	か	ら	違	う	目	で	見	ら	れ	て	い	る	よ	う	で
本	当	に	怖	か	。	た	で	す	。	そ	し	て	。	心	の	底	か	ら	悔
し	か	。	た	で	す	。													
私	は	。	4	年	前	の	こ	と	を	思	い	出	す	た	が	。	1	日	
で	も	早	く	以	前	の	福	島	を	取	り	戻	し	て	ほ	し	い	と	思
う	よ	う	に	な	り	ま	し	た	。	完	全	に	復	興	す	る	に	は	
ま	だ	ま	だ	時	間	か	か	か	る	か	も	し	れ	ま	せ	ん	。	で	も
福	島	か	ま	た	悪	く	言	わ	れ	て	し	ま	う	の	は	1	番	悲	し
い	で	す	。	胸	を	張	っ	て	福	島	の	名	前	か	出	せ	る	。	私
た	ち	福	島	県	民	か	ち	と	安	心	し	て	暮	ら	せ	る	。	そ	
ん	な	県	に	な	る	こ	と	を	願	っ	て	い	ま	す	。				

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 佐藤百華 年齢 14 歳 職業・学校名 矢吹中学校

今から4年前に大震災があ。てからる日
 日は特別な日になりました。あの日、日本は
 特に東日本は多大な被害にあいました。福島
 県でも原発の事故があり、自分の故郷を避難
 先とくなくてはならない人がいたり風評被害にも
 あいました。

4年経。た今、日本はもう震災前と変わら
 ない状態にな。ています。しかし、今だに苦
 しんでいる人もいるのです。原発の影響で今
 も避難した土地で生活している人。津波で亡
 くな。た家族の遺体を今も探し続けている人。
 地震の被害にあい仮設の校舎で授業を受ける
 学生。まだ復興の途中なのです。完璧に被災
 地の復興が終わるには、何十年と時間がかか
 ると思います。それに今から復興のために手
 伝えることをしようとしても少ないと思いま
 す。でも1人1人がまだ復興が終わ。ていな
 いと意識するだけで未来は少し変わると思いま
 ます。忘れないで下さい、まだ被災地の傷が
 癒えていないことを。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 澤山 新太郎

年齢 15 歳

職業・学校名 矢吹中学校

私	は	東	日	本	大	震	災	が	起	き	た	と	き	、	小	学	四	年	
生	で	し	た	。	バ	ス	ケ	ッ	ト	ホ	ー	ル	を	習	っ	て	い	て	、
同	じ	仲	間	三	人	と	一	緒	に	練	習	が	初	ま	る	の	を	学	校
の	う	と	オ	ル	の	い	れ	待	っ	て	い	る	と	こ	ろ	で	し	た	。
初	め	に	私	た	ち	は	小	さ	な	地	震	を	被	っ	た	。			
お	し	の	心	を	な	げ	て	下	さ	し	、	窓	を	開	け	て	逃	れ	た
地	震	の	中	、	給	食	の	お	し	の	人	が	窓	を	開	け	て	逃	れ
て	く	れ	て	し	て	も	助	か	り	、	お	し	の	人	は	後	、	全	力
で	校	庭	に	走	り	ま	し	た	。										
家	に	帰	り	、	テ	レ	ビ	を	付	け	る	と	、	津	波	の	町	を	
ひ	ん	ど	ん	乗	り	込	む	映	像	が	あ	り	。	次	の	日	も	ま	た
次	の	日	も	。	次	第	に	は	、	家	族	を	失	い	て	悲	し	い	人
と	な	り	、	そ	の	映	像	は	、	い	つ	に	な	っ	て	も	忘	れ	な
れ	な	い	。																
約	五	年	か	た	、	今	も	、	復	興	を	テ	レ	ビ	に	か	ん	が	あ
り	、	私	が	思	う	復	興	は	、	津	波	が	流	さ	れ	た	人	た	ち
が	全	員	見	つ	か	る	言	語	が	復	興	だ	と	思	う	。			

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 柴田彩花 年齢 15歳 職業・学校名 矢吹町立矢吹中学校

三月十一日、私は体調が悪く学校を休ま
 した。寝ていると、突然テレビから緊急地震
 速報が流れました。驚く暇もなく地震は襲
 ってきました。壁に飾りたる絵画を揺らすのがや
 りとびました。地震が弱まるころには家はどろ
 どろと揺れ、足の踏み場もありません。すぐ外に
 出て早に避難していましたが、余震は続きま
 した。父の仕事の都合で仙台にいたのが水
 井の手伝いや、妹の面影を見ていました。本
 本にあの何日間は大変で、もう一死を見るた
 りが辛く悲しい気持ちになりました。

この東日本大震災は誰一人忘れてはいけな
 いものだと思います。次の世代の人々にも伝え
 るべきなわけにはいかないと思います。そして
 福島は、原発事故を原因に良く思わない人が
 います。福島は火が暖かく、自然が素晴らし
 いです。様々なイベントや、雑誌、テレビを
 通じて福島の良いところを伝え、たくさんの火に福
 島の素晴らしさを知っていただきたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 関根 礼乃 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹中学校

東日本大震災がおきたのは、私が小学四年
 生の時でした。その時は何が起きたかよく分
 からず机の下で揺れが収まるのを呆然と待
 ていました。全校生が一斉に下校して、帰
 る途中でも大きな余震が度々ありました。そ
 れが止まるといえる車が動いたり、家の屋根が
 ら瓦が落ちてきたりなどとても危険な帰り道
 でした。しかし、一番事の重大さに気が付い
 たのは、予しじのニコースをかけた時でした。
 家や学校などの大きな建物が流されていく光
 景は、初めて見るもので、その後、流された
 死者、行方不明者の数にもゾッとしました。
 今でもまだ、発見されていな人がいます。涙
 に流されてしまった人、その遺族の気持ちに
 その人達にしか分からぬもの、自分達が
 どれほど幸せか思い知りました。
 未だに家に帰れない人や、当時の気憶で苦
 しんでいる人達はまだまだたくさんいると思いま
 す。苦しみや悲しさが無くなる日はないけ
 ど、少しでも和らげばいいなと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 水野和希 年齢 15歳 職業・学校名 知吹中学校

3	月	11	日	に	東	日	本	大	震	災	が	起	こ	り	ま	し	た	。		
私	は	地	震	の	時	、	学	校	に	い	ま	し	た	。	体	験	し	た	こ	
と	が	な	く	す	じ	く	不	安	で	い	っ	ほ	い	て	し	た	。	家	の	
後	も	余	震	が	あ	り	、	学	校	も	少	し	の	間	休	校	に	な	り	
そ	の	ま	ま	春	休	め	に	突	入	し	ま	し	た	。	地	震	の	影	響	
で	地	割	れ	や	家	の	い	が	く	す	れ	て	い	た	り	家	の	中		
が	ぐ	ち	や	ぐ	ち	や	に	な	っ	た	り	し	て	い	ま	し	た	。	水	
道	が	出	な	か	っ	た	の	で	役	場	に	水	く	井	に	行	っ	た	り	
買	い	物	も	行	け	な	か	。	た	の	で	、	あ	た	り	前	の	毎	日	
直	送	れ	な	か	っ	た	の	が	と	て	も	大	変	で	し	た	。	テ	レ	
ビ	を	う	け	る	と	、	ど	こ	の	番	組	も	津	波	を	映	し	て	い	
て	地	震	の	怖	さ	を	目	の	当	た	り	し	ま	し	た	。	今	現	在	
も	見	つ	か	っ	て	い	な	い	人	が	い	ま	す	。	一	人	で	も	多	
く	の	人	が	見	つ	か	る	こ	と	を	願	っ	て	い	ま	す	。			
福	島	県	志	原	子	爆	弾	な	ど	で	悪	く	思	っ	て	い	る	人		
が	多	く	い	ま	す	が	、	福	島	県	は	自	然	豊	か	で	心	暖	か	
は	大	連	続	決	り	出	い	ま	す	。	一	つ	の	問	題	で	福	島	県	を
悪	く	思	っ	て	い	る	人	達	に	福	島	県	の	良	さ	を	知	っ	て	
も	ら	い	た	い	い	で	す	。												

氏名 大河原 優太 年齢 15歳 職業・学校名 矢吹中学校

私の震災での体験は、小学三年生の時でした。その時は、あんたこてに落ちると思っ
てもいせんよした。学校で帰りの会をやって
いたころ、音か台始いまり小さなゆれか
きなゆれにたりとてビョクリしました。な
はんするよきに私はうらうらしてしま
した。でもなはんして時間かたつにつれて、家
のこてや家族のこてかしくはりにたりとて
不安でした。そして家に帰り家族か全員
で、帰っよして泣いてしましました。私は
あのこてのこてを忘れるこてはないと思
ました。

復興に向けては、町、県、全国が一つ
つて支えあつて行けば、復興にうながる
感いしました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 宇田川 梨乃 年齢 15 歳 職業 学校名 矢吹町立矢吹中学校

私	は	震	災	当	時	、	神	奈	川	県	に	住	ん	で	い	た	。	た	
か	ら	今	住	ん	で	い	る	福	島	県	の	学	校	の	友	達	に	比	べ
震	災	と	い	う	も	の	の	恐	し	さ	も	あ	ま	り	分	か	、	て	い
な	か	。	た	。	し	か	し	、	小	学	六	年	生	の	時	に	引	、	越
し	た	後	、	様	々	な	人	か	ら	体	験	の	恐	怖	を	聞	い	た	。
そ	し	て	私	は	ど	れ	だ	け	自	分	が	め	ぐ	ま	れ	て	い	た	の
か	も	学	ん	だ	。														
私	が	一	番	知	ら	な	か	。	た	こ	と	は	こ	の	震	災	に	よ	
。	て	大	切	な	も	の	を	失	、	て	し	ま	。	た	人	が	沢	山	い
る	と	い	う	こ	と	だ	。	家	や	学	校	、	職	場	、	も	し	く	は
家	族	や	友	達	な	ど	だ	。	も	う	二	度	と	返	、	て	こ	な	い
も	の	で	あ	る	。	当	時	は	ま	さ	か	自	分	が	こ	の	よ	う	な
人	が	身	近	に	な	る	と	は	思	、	て	い	な	か	。	た	。	し	か
し	、	今	は	こ	の	よ	う	な	人	達	の	た	め	に	全	力	を	つ	く
し	た	い	。	今	私	が	や	る	べ	き	こ	と	は	何	な	の	か	を	よ
く	考	え	行	動	し	て	い	こ	う	と	思	え	た	。					
私	は	誰	に	で	も	笑	顔	に	な	れ	る	日	が	来	る	と	い	う	
こ	と	を	伝	え	て	い	き	た	い	。	そ	し	て	、	本	当	に	笑	顔
の	あ	ふ	れ	る	明	る	い	日	本	と	な	。	て	ほ	し	い	。		

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 常松 梨里 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹中学校

私は、家族や友達がいいるから助け合、て生
 きていけると思いました。

東日本大震災が起こ、た三月十一日。私は
 その時、小学四年生でした。テレビを見て地
 震や津波で家が壊され、たくさんの人々が犠
 牲にな、たと思ひます。友達と離れ離れにな
 っ、てしま、たり、家族を失、てしま、た人々
 もいるのが悲しい気持ちでい、ばいひです。

ですが、東日本大震災から五年にな、た今
 復興が進んでいひます。被害があ、た宮城県も
 少しずつ復興が始ま、ていひます。一人一人が
 ば、ていひます。自分
 の震災があ、たことで、自分の家があり、家
 族や友達がいいるという普通な生活がどんなに
 幸せなことかに気付きました。家族や友達と
 一緒にいられることに感謝し、今生きてるこ
 との命を大切にしていこうと深く思ひました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 清水 大河 年齢 15歳 職業・学校名 矢吹町立矢吹中学校

私	は	、	東	日	本	大	震	災	が	起	こ	っ	た	こ	と	で	、	良	
く	経	験	を	し	て	思	い	ま	し	た	。	地	震	や	津	波	が	ど	
れ	だ	け	恐	ろ	し	い	が	、	ま	た	そ	れ	に	備	え	て	ど	ん	
な	対	策	を	す	れ	ば	い	い	の	か	な	ど	、	た	く	さ	ん	の	
身	を	学	ぶ	だ	の	で	、	そ	う	思	い	ま	し	た	。	大	震	災	
は	、	自	然	災	害	な	の	で	、	そ	れ	を	止	め	る	こ	と	は	
で	き	ま	せ	ん	。	な	ら	ば	、	ど	う	対	策	し	、	ど	う	の	
場	を	し	の	ぐ	か	が	大	切	だ	と	思	い	ま	す	。	私	の	家	
で	は	、	震	災	後	、	水	が	出	ま	せ	ん	で	し	た	。	そ	の	
こ	と	か	ら	家	で	は	、	井	戸	を	作	り	ま	し	た	。	水	は	
、	大	切	な	の	で	、	次	に	大	震	災	が	来	た	時	の	対	策	
を	し	ま	し	た	。	他	に	も	非	常	食	な	ど	の	対	策	を	行	
い	ま	し	た	。	今	で	は	、	復	興	は	で	き	て	き	て	い	る	
と	思	い	ま	す	。	た	だ	、	ま	だ	、	大	震	災	の	傷	跡	が	
残	っ	て	い	る	地	域	が	あ	る	と	思	い	ま	す	。	な	の	で	、
私	に	で	き	る	こ	と	は	、	で	き	る	だ	け	の	ボ	ラ	ン	テ	
ィ	ア	に	参	加	し	、	大	震	災	が	起	こ	る	前	の	元	の	綺	
麗	な	福	島	に	し	て	い	き	た	い	と	思	い	ま	す	。	小	さ	
い	こ	と	か	ら	始	め	、	そ	れ	を	積	み	重	ね	ら	ば	、	復	興
な	ど	簡	単	に	で	き	る	と	思	い	ま	す	。						

氏名 伊藤 玲音 年齢 15 歳 職業・学校名 次々中学校

2	0	1	1	年	の	3	月	1	1	日	に	お	こ	っ	た	こ	と	は		
今	で	も	鮮	明	に	覚	え	て	い	ま	す	。震	災	が	お	こ	し	た	時	
に	は	物	た	し	は	小	学	校	に	居	て	卒	業	式	の	練	習	を	し	
て	い	ま	し	た	。そ	し	て	、	午	後	2	時	4	6	分	に	な	っ	た	
た	ら	強	い	揺	れ	が	ま	ま	し	た	。そ	の	時	に	す	わ	り	、	て	
い	た	イ	ス	の	下	に	墜	ん	で	い	ま	し	た	。数	分	間	続	い	て	
い	た	の	で	と	し	て	も	こ	わ	が	、	た	で	す	。天	上	か	ら	下	
は	ホ	ー	ル	な	ど	の	物	が	落	ち	て	ま	ま	し	た	。先	生	の	指	
指	示	で	校	庭	に	逃	げ	ま	し	た	。け	が	人	が	1	人	も	居	な	
な	が	、	た	の	で	し	て	も	畏	が	、	た	で	す	。余	震	が	続	く	
中	校	庭	に	逃	難	し	て	い	る	と	ア	ー	ル	が	壊	れ	て	水	が	
が	溢	れ	て	ま	ま	し	た	。し	て	も	印	象	に	残	っ	て	い	ま	す	。
わ	た	し	の	家	で	は	、	こ	の	体	験	か	ら	災	害	に	対	し	て	の
対	策	を	行	う	こ	と	に	し	ま	し	た	。災	害	ブ	ッ	ス	な	ど	を	買
い	ま	し	た	。わ	た	し	は	、	こ	の	体	験	か	ら	命	の	傳	え	を	知
り	ま	し	た	。命	は	と	し	て	も	大	事	だ	と	知	り	ま	し	た	。こ	の
体	験	か	ら	、	こ	れ	が	ら	命	を	大	切	に	す	る	こ	と	に	し	ま
し	た	。																		

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 村上 誠 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹中学校

昔	通	の	生	活	で	生	活	を	送	り	て	来	た	。当	時	の	前	で	は	甘	く	
と	も	暮	ら	せ	た	と	思	い	に	ま	ち	な	。ま	た	、	女	子	の	お	も	た	
う	水	さ	い	霧	が	お	き	た	と	き	は	、	周	り	の	人	の					
役	に	立	て	る	お	う	に	、	行	動	し	た	と	い	ひ	ま	す	。				

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 落葉 巧 年齢 14 歳 職業・学校名 矢吹中学校

私、小学4年生の時、学校の卒業式の練習
 が終了する直前に地震が発生しました。
 最初は小さかった地震が、段々と大きくな
 り、今までに経験した事のない地震となりま
 した。体育館について、卒業式の練習をしてい
 たため、私は他の児童もいすの下に隠れまし
 た。2分間が気が抜けず後に、全員が校庭に
 避難しました。アスファルトや枝舎にヒビが
 割れ、プールはゆれて大量の水が流れ出し
 ました。幸いに怪けが人はいませんでした。

私は家族が心配になりましたが、祖母がむ
 かしにきてくれて、他のみ人も無事で安心
 しました。

あれから約5年た、た今でも震災の跡は残
 っている所もありますが、少しずつ復興してい
 るのが良かったです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 大竹 颯斗 年齢 14 歳 職業・学校名 矢吹中学校

私は、東日本大震災の時に、小学4年生でした。卒業式の練習中で体育館にいました。座っていると、ガタガタと全体が揺れ始め、めんな心配そろにしていると、大きく揺れてきて、全員外に出ようとしたが、とても歩きにくくいぼごごした。外に出ると、校庭に集合しました。横にあったプールがろは水があふれてきていました。ナイターも大きく揺れていた、とても怖く、たの巻、今でもすごく頭に残っています。

私が地震などとても学んだことがありません。それでは、どこだけ避難訓練が大切かとしたらとです。宮城県の津波に襲われた地域では、避難訓練の練習の質の違いで、犠牲者の人数も大きく違っているのだ、いつもは、いつも避難訓練の一回一回大事にそれから起るかもしれない災害に備えてほしいです。

氏名 酒井 陸

年齢 15 歳

職業・学校名 矢吹中学校

3	月	11	日	お	た	し	は	小	学	生	年	生	。	卒	業	式	の	練	
習	中	で	し	た	。	14	時	46	分	お	た	し	遠	を	大	き	な	揺	れ
が	襲	い	ま	し	た	。	お	た	し	は	何	が	起	こ	。	こ	の	事	の
か	わ	か	り	ま	せ	ん	で	し	た	。	た	だ	「	恐	怖	」	の	二	文
字	が	頭	に	浮	か	ん	だ	だ	け	で	し	た	。	揺	れ	が	収	ま	り
校	庭	に	出	た	と	き	。	そ	こ	に	は	驚	愕	の	光	景	が	広	が
っ	て	い	ま	し	た	。	地	面	に	亀	裂	が	入	り	。	プ	ー	ル	の
水	は	あ	ふ	木	を	感	ま	し	た	。	な	ん	だ	ら	い	し	た	。	
こ	の	よ	う	な	経	験	は	も	う	一	生	で	さ	な	い	か	も	し	
た	ま	せ	ん	。	10	00	年	に	一	度	の	地	震	と	も	言	わ	れ	て
い	ま	す	。	こ	の	地	震	を	憎	む	人	は	大	勢	い	る	と	思	い
ま	す	。	し	か	し	。	お	た	し	は	こ	の	地	震	を	憎	み	は	し
ま	せ	ん	。	自	然	災	害	に	か	ら	任	肯	な	い	と	思	う	か	ら
で	す	。	こ	の	地	震	は	一	生	忘	れ	ま	せ	ん	。	ま	た	起	こ
う	か	も	し	た	ま	せ	ん	。	な	の	で	二	本	か	ら	は	自	然	
災	害	に	対	す	る	備	え	を	呼	び	か	け	て	い	ま	し	た	と	思
自	分	の	子	孫	や	こ	の	経	験	を	お	ま	な	か	。	た	人	々	に
語	り	細	い	で	い	ま	し	た	い	で	す	。							

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 佐藤 敬朋 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹中学校

あ	た	し	の	復	興	へ	の	想	い										
あ	た	し	は	東	日	本	大	震	災	で	は	じ	め	と	天	を	お	お	お
震	害	に	お	い	ま	し	た	。そ	の	震	害	の	跡	は	ま	た			
あ	た	し	の	ま	あ	り	に	ま	た	と	ま	な	り	ま	す				
は	友	人	の	家	が	倒	壊	し	つ	の	こ	の	前	に	復	興	住	宅	に
入	。ま	ま	ら	ず	。友	人	は	「	あ	れ	は	か	の	家	は				
ま	ま	く	と	生	活	が	大	変	な	。そ	の	こ	の	ま	ま				
し	た	。ま	た	あ	た	し	の	家	の	ま	ま	た	に	ま	ま				
復	興	住	宅	が	あ	ら	ま	た	。そ	の	ま	ま	た	に	ま				
ま	ま	の	前	を	通	り	ま	し	た	。そ	の	ま	ま	た					
ま	ま	の	ま	ま	の	ま	ま	の	ま	ま	の	ま	ま	の	ま	ま	の	ま	ま
思	い	ま	す	。ま	ま	の	ま	ま	の	ま	ま	の	ま	ま	の	ま	ま	の	ま
ま	ま	の	ま	ま	の	ま	ま	の	ま	ま	の	ま	ま	の	ま	ま	の	ま	ま

氏名 篠崎 楓馬

年齢 14 歳

職業・学校名 矢吹中学校

私が小学生の時、卒業式の練習中でした。
 ところがいきなり地面が揺れだして、その揺れはなや
 まらばがりが、どんどん強くなり揺れにあってい
 ました。先生達に誘導され、校庭に避難し
 ました。そして皆人を親が来るのを待つてい
 ました。みんな親が迎えに来てそれぞれ家に
 戻りました。私の親も迎に来て家に戻りました
 だが、家に戻れるとこんなに嬉しかったもの
 の、家の中を見た瞬間でその嬉しさはなくな
 りました。中はぐちゃぐちゃで皿がどが散
 ちまわって足の踏み場もないくらい大変でし
 ました。

もう二度おんを思い出したくないです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 高澤皓人

年齢 14 歳

職業・学校名 夫吹中学校

私は、東日本大震災で大きな被害を受けました。震災直後は自宅にも入れず、祖母の家にはしばらく泊まっていた。短い間でした。避難もしました。北海道、新潟県などです。でも、震災後一番印象に残っているのは、この家が全壊したことです。古い家だったので、在り方から、このように壊れるとは思っていません。たしかに建て直すこともできましたので良かった。しかし、今は安全に暮らしています。

私はこの東日本大震災から2つのことを学びました。

1つ目は、自然の恐ろしさです。これは今までに甚大な被害をもたらすことのできる自然は、とても恐ろしいなと思いました。

2つ目は、助け合いの素晴らしさです。震災からの復旧・復興はとても早かったです。この復旧・復興は、人々の助け合いの形だと思ふのととても素晴らしいなと思いました。

平成23年3月11日、震度6強の大地震が
 福島県と宮城県を中心におこりました。そし
 て大きな津波が来て多くの人が亡くなっ
 てしまいました。そして福島では原子力発電所が
 爆発するということも赤くなりました。僕は当時
 小学4年生だったので放射線についてはよく
 分かりませんでした。でも今思い返してみ
 るととても大変だうだなと感じました。また地
 震がおきて1カ月ぐらいの間食料や水が不足
 してとても大変な生活を送っていました。しか
 し時間が過ぎるとともに復興が進み今のよう
 な充実した生活を送れるようになりました。
 しかしまだ復興が進んでいない地区がありま
 す。その地区の人々達はまだ町や村に帰
 りてこれていません。またまだ除染作業をして
 いない所もあります。だからこれからの未来
 に向けると一日でも早く復興と除染作業をして
 ほしいです。そしてすべての人が幸せな生活
 を送れるようになっほしいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 芳明 廉 年齢 15歳 職業・学校名 矢吹中学校

2011年3月11日私は小学5年のとき
だ。た。その日はいつものように、帰るた
めの準備をしていた。その地震はいきなりき
きました。先生の指示で校庭に出ました。出た
とその校舎は、いまも覚えています。壁は
ひびかわれていました。このような体験をし
て自然災害はいつでも危険ということを知りました。
めて思いました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 島 遼太郎 年齢 14歳 職業・学校名 矢吹町立矢吹中学校

東日本大震災、それは私にとってとても恐
 しい出来事でした。当時は小学校の体育館で
 卒業式の練習を行っていたんです。すると突然
 地響きがし、その後、震度も弱のとても大
 きな揺れが襲って来ました。体育館の天井が
 ずり落ち、破片が落ちて壁にぶつか
 りました。また恐怖を感じました。それから校
 庭に避難したのですが、ユートリートや校舎
 の壁が、いたるところにひびが入ってしま
 いました。私は何も考えられませんでした。二
 日後には大きな災害は、今までの一度も経験
 したことが無かったです。家に帰ると、
 津波、地盤沈下という、各地での被害状況
 が報道されました。中でも私が恐怖に感
 じたのは、原発の爆発です。その時私は初
 ら、放射線の恐ろしさを知りませんでした。
 震災からも少しづつ今年と違って、私は今
 までの通りの生活を送ることにできています。
 しかし心の底からまだ怖い方もいます。早く復興
 し、全員が幸せに暮らすことを願っています。

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 本田 響 年齢 15 歳 職業・学校名 大炊町立大炊中学校

私は当時、小学校4年生だった。卒業式の練習で体育館にいた。突然、窓ガラスが揺れ建物も今まで見たとさのないくらい揺れた。その時私は、瞬時に「家は大丈夫かな」と思った。急いで校庭に避難をし、家族の迎えを待っていた。なかなか家族が来なく、なおさら家と家族が心配になった。すると、父が迎えに来てくれた。帰る途中、道路のマンホールは隆起していて驚いた。急いで家に戻り、家族が無事で何よりも嬉しかった。家の中は冷蔵庫が倒れ、ピアノが動き、自分の家ではない様だった。テレビをうけると、すべての局が津波の映像だった。本当に驚いた。それから毎日水をもらいに家族で文化センターに行った。原発の事故があり、福島県の農作物は全く売れなかった。その時は自分のことのように日本の国民にかかりした。これからもし、同じようなことがあたら、日本の国民全員が助け合わないといけないと思う。それが何よりもあの復興だと思う。

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 櫻井 年 15 歳 職業・学校名 矢吹町立矢吹中学校

僕は、震災当時東京にいました。小学校の校
 庭で、サッカーリーグでの活動をしていると思
 っていた矢張り水にあい、驚いたのを覚えていま
 す。保護者の迎えがなければ、帰れなかった
 ので、教室で妹やまぐささんの友達と一緒に母
 の帰りを待ちました。母は、交通機関が麻痺
 し、徒歩で帰って来たため小学校に着いた時
 は夜遅く、安心からか涙ぐんでいました。幸
 々住んでいたアパートの被害は何もなく、ほ
 っとしました。テレビをみると福島の方
 のすごい被害状況を目にし、母が涙ぐんでい
 たわけが分かりました。母の実家が、福島だ
 ったからです。その後、母の実家の家が無事
 である事を確認でき、安心しましたが東京で
 も多くの人が被害にあい、被災しているのを
 見てつらかったです。震災から二年後、矢吹
 町に引っ越しましたが、改めて福島の方の被災
 被害の偉大さや、見えにくい放射能への不安を強
 く感じています。多くの志を持った人の命ま
 で一生懸命命を復興の力にならなければなら
 ないです。

(20文字 × 20行)

氏名 八百板 佑哉 年齢 15 歳 職業 学校名 矢吹中学校

平成二十三年十一月三日四時四十六分、東日本
大震災が起きました。その時、私は教室にい
ました。急いで机の下に隠れました。揺れが
大きく机は動き、戸はカタカタという音をた
てていました。揺れがおさまると全校生が校
庭へ出ました。その時はとても不安でした。
家へ帰った後も余震は続きそのまま春休みに
なり春休みが明けから学校へ行くというも
通りの学校とは言えませんでした。校舎には
細かいひびがありました。私には一人の親友
がいました。教室にはいませんでした。彼は
震災の影響で引越していました。お別れを
言うこともできなかったことがとても悲しか
ったです。しかし、私よりも悲しい思いをし
た人もいると思います。震災前のように暮ら
しができるかはわかりませんが、それでも一人
でも多くの人が笑顔で暮らしていけるよう
なっでほしいと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 阿部 紗優 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹町立矢吹中学校

私は、東日本大震災という大きな災害がおこったことが始めてで、とても怖かったです。水がとまったり、食べ物も、あぐ売れてしまったり、とても大変な生活でした。役場などに行って、食べ物をもらって食べたり、水をくんだり大変でした。でもこの経験から、今こうして普通に暮らしているのが幸せだなと思います。どんどん復興に近づいてきているのだから本然とも頑張ると思います。

氏名 井澤 真美佳

年齢 14 歳

職業・学校名 天吹中学校

私は、東日本大震災を経験しました。その
 時私は学校にいてみんながクウウニドヘにげ
 ました。その時はとてもこわかった。家
 に帰ると家の外も中もぐちゃぐちゃになっ
 ていて電話もつながらないし、水も足らない状
 態でした。テレビで、テレビで津波の情報も
 流れていて人が何千人もせくな、たという事
 も流れていました。夜も全然お休みせん
 でした。

この経験を通して、これからの生活では、
 毎日平和ではないという事を自覚して生活し
 ていきたいと思いました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 佐藤 悠太 年齢 14 歳 職業・学校名 大槻中学校

東日本大震災の体験談と復興への想い

東日本大震災が起きてしまった。た当時、私は
 小学4年生でした。私の学校は事前発表まで
 休校時刻が早く、私は友達の家へ避難に行
 っていました。3月11日の夜、極寒で雪が降っ
 ていたあの異常気象の後に起きた大地震
 は、さながら天変地異のようでした。

私は、友達の家で大揺れを体験しました。
 最初小さい揺れだったため気にも留めていま
 せんでした。急になりに、慌てて家から
 避難しました。そして家を取り返ると、窓
 が一斉に割れ、屋根の瓦は崩れ落ちてしま
 った。大惨事になってしまいました。今でも、
 驚くほど鮮明に思い出すことが出来ます。

震災に見舞われた時、原子発電所爆発、海
 沿いの家屋は軒並み流された。壊れた物々の死
 者、行方不明者、正直、もう復興は望むことが
 ないほどだと思っていました。ですが5年経
 ちそろそろ今、復興は進んでいます。困りごとを
 合わせて、昔のような海に帰って欲しいです。

氏名 鈴木 悠貴 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹中学校

それは本当に突然だった。遠くから低い音が響いて、床が揺れ、体育館に音が響いた。遠くでボールなどが落ちてきていた。いすの下に隠れる。必死にいすにつかまるが、おぼと動いていた。悲鳴が響く。

校庭へ行くとき見る人、川、暗い空が見えた。川はプールの水だった。校庭のまん中でかたまっていた。泣く声があちこちにある。笑っていても弾がりだった。とても寒い。ジャンパーもない。雪がふってきた。

おかえにきた親達と車で町をめる。ぐちゃぐちゃだ。採いがたおれ、マンホールがとび出し、町が姿を変えていた。

テレビでは地震についてやっていて、津波を初めて見た。町がのまれるのを、泣く人を画面越しに見ていた。次の日、事故を知る。とても怖くなった。初めての怖さだった。

世界の終わりの様だった。日常が消えた瞬間だ。大げさな表紙のこれを、実際におきた非日常の現実を表すことばとしよつが。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 榎田 瑞姫 年齢 15歳 職業・学校名 知吹町立知吹中学校

こ	の	大	震	災	で	た	く	さ	ん	の	人	が	亡	く	な	り	、	た	
く	さ	ん	の	人	が	心	を	病	た	め	ま	し	た	。	テ	レ	ビ	の	中
に	映	る	津	波	が	す	ご	く	こ	わ	く	て	、	こ	れ	が	落	ち	は
な	く	現	実	だ	と	言	え	ま	し	た	。	大	震	災	か				
ら	持	ち	五	年	、	復	興	が	少	し	ず	の	見	え	て	き	て	、	仮
設	住	宅	も	た	く	さ	ん	を	ま	て	、	少	し	ず	つ	落	ち	着	い
て	き	ま	し	た	。	原	来	を	た	く	さ	ん	の	人	が	住	む	家	や
帰	る	と	こ	ろ	を	な	く	し	ま	し	た	。	で	も	、	そ	う	い	う
時	に	人	と	人	が	支	え	合	い	な	が	ら	、	今	ま	を	暮	ら	し
て	き	ま	し	た	。	人	と	人	が	支	え	合	い	、	仲	間	と	い	う
意	識	と	絆	が	で	き	て	き	ま	し	た	。	祭	り	や	イ	ヤ	ニ	ト
な	ど	を	た	く	さ	ん	の	人	が	笑	顔	に	な	り	、	み	ん	な	の
心	が	明	る	く	な	り	ま	し	た	。	こ	れ	か	ら	も	震	災	を	忘
れ	ず	、	亡	く	な	っ	た	人	達	の	こ	と	を	忘	れ	ず	、	復	興
を	し	て	い	き	た	い	で	す	。	そ	し	て	、	み	ん	な	の	心	が
ら	大	き	な	傷	を	少	し	ず	つ	な	く	し	、	み	ん	な	が	笑	顔
を	暮	ら	せ	る	よ	う	に	し	た	い	で	す	。						

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 栗城大輔 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹町立矢吹中学校

私	は	東	日	本	大	震	災	の	日	は	、	体	調	を	崩	し	て	し	
ま	い	学	校	を	休	ん	で	い	ま	し	た	。	テ	レ	ビ	を	つ	け	て
い	て	寝	ど	う	と	し	て	い	た	時	、	あ	ま	り	聞	い	た	こ	と
が	な	い	音	が	テ	レ	ビ	に	流	れ	た	の	で	す	。	そ	れ	は	緊
急	地	震	速	報	で	し	た	。	揺	れ	が	始	ま	り	最	初	は	小	さ
い	揺	れ	だ	。	た	か	、	ど	ん	ど	ん	大	き	く	な	っ	て	き	て
恐	怖	を	感	じ	外	に	逃	げ	ま	し	た	。	外	に	逃	げ	よ	う	と
し	て	ド	ア	を	開	け	、	外	に	一	歩	路	み	出	し	た	時	、	隣
に	置	い	て	あ	る	ガ	ラ	ス	な	ど	の	食	器	が	た	く	さ	ん	入
れ	て	あ	る	棚	が	倒	れ	て	き	て	あ	と	ト	妙	遅	そ	か	っ	た
◇																			
う	大	怪	我	を	し	て	い	た	と	思	い	ま	す	。					
私	が	東	日	本	大	震	災	の	ニ	ュ	ー	ス	な	ど	を	見	て	思	
っ	た	こ	と	は	、	建	物	の	老	朽	化	で	す	。	自	分	が	住	ん
で	い	る	地	域	も	建	物	が	崩	れ	て	し	ま	。	て	い	る	の	を
多	く	見	ま	じ	た	。	建	物	の	中	は	、	棚	を	固	定	す	る	な
ど	し	て	転	倒	防	止	を	し	て	、	建	物	は	耐	久	性	の	建	物
が	増	え	て	い	く	と	良	い	と	思	い	ま	す	。	こ	れ	か	ら	の
福	島	県	は	震	災	前	と	同	じ	く	ぐ	い	、	い	や	、	震	災	前
よ	り	も	笑	顔	が	多	く	見	れ	る	こ	と	を	私	は	願	っ	て	い
ま	す	。																	

氏名 小針竜也

年齢 15 歳

職業・学校名 矢吹中学校

1 僕が東日本大震災で学んだことは3つあります。

まず1つ目は地震の恐ろしさです。震災が起こる前地震なんてただ揺れるだけなんだと思っていました。が今では人の命を奪う物なんだと思いました。

2つ目は命の大切さです。震災で命を失った人の命が奪われるとたゞ悲しみます。それにとくなく、た人もとても可哀想なことです。

3つ目は人と人との助け合いです。ここまでの復興をさせたのはたくさんの方の支援のおかげです。人は困った時には助け合う物なんだということがあります。

たくさんの方の命が奪われ悲しみもあるのですが、学んだこともたくさんありました。

氏名 佐々木 雅斗 年齢 15歳 職業・学校名 矢吹中学校

東日本大震災は、多くの人から生活を奪い
 ました。今でも、元の生活が出来ていない人
 も多いです。あまりに突然で、受け入れられ
 ない人も多かったです。でも、自然災害
 なので、何かを憎むという事も無く、無力感
 に襲われるという面もあります。私は中通り
 に住んでいるので、大きな被害を受けたわけ
 ではありません。なので私に、家を流されて
 しまった人々の苦労も経験がないです。現
 在は復興が進んでいる最中ですが、元の暮らし
 しを取り戻せない人も居ます。どうすればいい
 のか。どうして福島なんだ。そう思う人も
 います。しかしそう思っているだけでは前に進めな
 い。と思う人もいます。どう思えばいいかに
 正解はありません。ですが一人一人が全員、
 同じ考えや思いがある訳ではありません。た
 だ境遇が同じというだけです。なので一人一
 人が自分の境遇に向き合い、やってくる日々
 を生きていけて、復興だと思えるので、私もそ
 んなように強く生きたいと思います。

氏名 須藤 楓基 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹町立矢吹中学校

私が今も想、ている東日本大震災のことは
地震の後に発生した原発のことです。
原発のことで想、ていることは二つありま
す。一つ目は原発の事件が発生した当時の事
です。家のかわらがかなり数落ちていま
したし、玄関の柱が一本抜けましたので色々
と不安にな、ていた所に原発の事がテレビで
放送されたのでより不安が増していきました。
一時期はひとこの家や親類の家で避難してい
ました。その時は、いつにな、たが元の家
に戻、てこれるのかなと思、ていました。二つ
目は、現在も想、ていることです。福島県の
原発が事故を起こして中から出た放射線など
を気にしている人達がいるのに現在も日本中
では原発が動いていることです。地震が少な
い所なりいゝですか日本は地震が多い国なの
でまた原発が事故を起こすのでおと想、たこ
とがありました。そんなことが起らずに生活
出来たらいいなと考えました。